様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　5　月　18　日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2009～2012
課題番号：21401023
研究課題名（和文）環オホーツク海地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究
研究課題名（英文）　Development of pre-modern trading networks and the formation of native groups in the Circum—Okhotsk Sea region

研究代表者
天野　哲也（AMANO　TETSUYA）
北海道大学・総合博物館・資料部研究員
研究者番号：９０１２５２７９

研究成果の概要（和文）：古代中世に環オホーツク海の諸集団は，交易を梃子にして，1．技術の改良や領域の明確化など生産体制を強化し，2．民族的な形成を進行させ，3．近代国家の政治的支配が及ぶに至って，国家に包摂・分断され変容を遂げた。

研究成果の概要（英文）：Ancient and Medieval peoples living along the coast of the Okhotsk sea were becoming incorporated into vast inter-related barter networks. Based on this relationship, they achieved three remarkable social characteristics (1. Improved production and prioritized use of territories, 2. Well defined production groups based on ethnicity, 3. Division and absorption of these ethnic groups by later states that gained political control of this region).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2010 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2011 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2012 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
総　計	13,600,000	4,080,000	17,680,000

研究分野：人文学Ａ
科研費の分科・細目：東洋史
キーワード：環オホーツク海地域，交易，前近代，諸民族形成史，中国，形質人類学，遺伝学

１．研究開始当初の背景

これまでのわれわれの調査・研究で次の 2 点が解明できた。(1) 海洋民のオホーツク文化が 5 世紀頃サハリン南西部で形成され,中期にあらたな要素が加わって，北海道東部から千島列島に展開した(2002 年国際シンポジウム"Okhotsk Culture Formation, Metamorphosis and Ending,"［天野・小野 2007]）。(2) このオホーツク人は,ウリチやニヴフ,ネギダルなどアムール下流域～サハリン北部の諸民族とコリャークやチュクチなどオホーツク海北岸地域の集団がミックスした要素をもち,その交流の舞台はオホーツク海西岸地域であった可能性が高い。しかもこの北方民的要素(Y1 遺伝子ハプロタイプ）はオホーツク人を通じてアイヌ民族にももたらされたと考えられる(2006 年国際シンポジウム"Life and Roots of the Okhotsk Culture,"［Sato et al. 2007]）。問題はそのプロセスと動因である。このオホーツク海西岸地域は,極北・高緯度地方とアムール下流域をつなぐ重要な地域であるにもかかわらず,考古学的な情報に関してほとんど空白に近いため,上記の考古学・人類学の仮説を充分検証する条件がない状況にある。それ故,本研究では環オホーツク海地域・アムール下

流域の現地調査を行って高精度のデータを得,上述の研究成果を検証し,さらに新たな展望を得る。

２．研究の目的

この環オホーツク海地域は低い人口密度と豊富な生物資源,とりわけ毛皮獣が特徴である。これら毛皮製品は,より南の地域へ輸出された。つまり環オホーツク海世界は,河川交通で中国本土と結ばれるとともに,沿岸交通によって環日本海世界・環シナ海世界ともリンクしていた。

中国を基点とするこの広大な相互関連・交易ネットワークに,極東にあった諸集団は否応なく組み込まれてゆき,その過程において民族的な形成が進行すると予想される。極東にあった諸集団における交易ネットワークの伸展と,その社会文化的影響を,古代から中世さらに近世・近代と検証することによって,日本列島周辺の海洋世界のなかで,ほとんど研究が進んでいない,環オホーツク海世界における民族形成の実態を明らかにすることが最終目的である。本課題では, 特に, 上記交易ネットワークの結節点たる環日本海世界の北方地域(ロシア沿海地方・アムール下流域・サハリン・北海道・東北北部)における交易と民族形成の研究成果に立脚して,これとの比較によって,日本列島周辺の三つの海の世界,すなわち環オホーツク海世界・環日本海世界・ 環シナ海世界の相互関連を明らかにし,海からの視点による日本史の再構築を試みる。

３．研究の方法

ハバロフスク市博物館,コムサモルスク市博物館,ニコラエフスク市博物館所蔵資料の観察・ 記録・分析によって,アムール下流地域の考古学的情報を収集し,データ解析をおこなう。これによりオホーツク文化の形成に至る過程,とりわけ高緯度地方とアムール下流域地方の文化要素の融合過程を明らかにする。

モスクワ大学,サンクト・ペテルブルグ人類学博物館蔵の環オホーツク海地域集団人骨の形態・DNA 分析を行い,オホーツク人・続縄文人・アイヌとの比較検討を進めることによって,これらの 集団の近縁・系統関係を明らかにする。さらに動物遺存体の DNA 分析を進めて,各種毛皮獣などの地理的分布の確認とそこからの搬出・集積地・輸送経路を推定・復原する。このような集団の動態から,移動拡散の要因(動乱・難民,交易用の毛皮獣獲得のための領域化進行等)を推定し,環オホーツク海地域の集団形成に向かう歴史を明らかにする。

1980 年代以降の日本史研究では,環日本海地域・環シナ海地域概念を設定し,国家と地域の相克のなかに歴史の展開を見ることにより,新しい成果をおさめてきた。しかし,環オホーツク海地域については,そのような試みは全く行われなかった。そもそも,環オホーツク海地域という枠組みの設定が可能かすら,これまでは検討されてこなかった。その意味では,海の視点から日本史を再構築するという試みは,不十分であった。本研究の成果は,このような,学会の偏った状況を是正し,環日本海・環シナ海地域との関係で,日本史を見直す機会を提供するものである。

アムール川下流域からサハリンにかけては,中国王朝の影響力が, 11・12 世紀,13 世紀,15 世紀初頭と最低でも 3 回は及んでいる。この分野では,中国の文献史料の調査がかなり進んでいるが,これに加えて碑文や古地図の調査を行うことによって,文献史料を補強する。また,出土銭貨の分析を行うことにより,北東アジアにおける中国銭貨の流通システムのなかで,アムール川下流域・サハリンの占める位置を明らかにする。これにより,中国王朝がこの地域で展開した朝貢交易の実体を解明する手がかりをつかむことが可能になろう。

４．研究成果

古代中世に環オホ-ツク海の諸集団は, その豊富な資源を介して, 中国さらに日本を基点とする広大な相互関連・交易・物流ネットワークに組み込まれていった。その結果,

(1) 技術の改良や領域の明確化など生産体制が強化されたこと,
(2) その過程において民族的な形成が進行したこと,
(3) 次いで, この地域に近代国家の政治的支配が及ぶに至ったこと

により, これらの諸民族が好むと好まざるとにかかわらず国家に包摂・分断され変容を遂げて行ったことを, 考古・歴史学・民族学・形質人類学・遺伝学の面から解明した。この成果は, 従来の日本史の枠を大きく拡大し, また東洋史の中で研究が大きく立ち後れていた地域に照明を当てる意義ももつものと言える。

この取り組みは, 日ロの研究者によって共同で進められ, その成果を国際シンポジウム(2012 年 6 月 2-3 日)と『北海道大学総合博物館研究報告』6 号(2013 年 3 月 31 日刊行), および HUSCAP(北海道大学学術成果コレクション)で公開した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 39 件）

① Tetsuya Amano, Hideo AKANUMA, Artur V. Kharinskiy
Study on the production region of iron goods and the roots of forging technology of the Okhotsk Culture. Bulletin of the Hokkaido, University Museum,査読有, 6 号, (2013), 1-17
② 菊池俊彦, オホーツク海北岸地域とサハリンの交通路―櫛目文土器の出土と関連して―, Bulletin of the Hokkaido University Museum,査読有, 6 号, (2013), 18-26
③ Yury G. Nikitin, Some results from the Posiet Grotto investigation.
Bulletin of the Hokkaido University Museum, 査読有, 6 号, (2013), 27-45
④ 関口　明, 中世日本の北方社会とラッコ皮交易―アイヌ民族との関わりで―, Bulletin of the Hokkaido University Museum, 査読有, 6 号, (2013), 46-57
⑤ 中村和之・竹内孝・森岡健治, 北海道におけるガラス玉の流入とその背景―北海道平取町から出江戸した資料を中心に―, Bulletin of the Hokkaido University Museum, 査読有, 6 号, (2013), 58-65
⑥ 三宅俊彦, サハリン出土の銭貨, Bulletin of the Hokkaido University Museum,査読有, 6 号, (2013), 66-85
⑦ 佐々木史郎, 近世の環オホーツク海地域南部におけるクロテン, ギンギツネの流通と狩猟方法, Bulletin of the Hokkaido University museum, 査読有, 6 号, (2013), 86-102
⑧ 増田隆一, 遺伝的特徴からみたオホーツク人―大陸と北海道の間の交流, Bulletin of the Hokkaido University Museum,査読有, 6 号, (2013), 103-108
⑨ 石田肇・下田靖・米田穣・内藤裕一・長岡朋人, 中世オホーツク文化人骨の生活誌 Bulletin of the Hokkaido University Museum, 査読有, 6 号, (2013), 109-115
⑩ 松枝大治, 東ロシア地域の地質と鉄資源情報―特に先史時代における鉄器の鉄鉱石の起源推定に関連して―, Bulletin of the Hokkaido University Museum,査読有, 6 号, (2013), 116-129
⑪ Вадим Тимохин , [Из научного наследия В. А. Тимохина] : Техника орнаментации берестяных изделий в связи с орнаментации берестяных изделий в связи с этнической историей Приамурья.
Bulletin of the Hokkaido University Museum, 査読有, 6 号, (2013), 130-144
⑫ 赤石慎三・越田賢一郎・中村和之・竹内孝, 苫小牧市内遺跡出土のガラス玉について (1), 苫小牧市博物館館報, 査読無, 第 10 号, (2013), 15-23
⑬ 石橋孝夫・中村和之・竹内孝・越田賢一郎, 石狩市八幡出土のガラス玉の分析, いしかり砂丘の風資料館紀要, 査読無, 3 巻, (2013), 23-36
⑭ Nagaoka T, Ishida H, Shimoda Y, Sunagawa M, Amano T, Ono H, Hirata K.
Estimation of skeletal adult age distribution of Okhotsk people in northern Japan. Anthropological Science, 査読有, 120 巻, (2012), 103-113
⑮ Koganebuchi K, Katsumura T, Nakagome S, Ishida H, Kawamura S, Oota H
The Asian Archival DNA Repository Consortium. Autosomal and Y-chromosomal STR markers reveal a close relationship between Hokkaido Ainu and Ryukyu islanders. 査読有, 120 巻, (2012), 199-208
⑯ Shimoda Y, Nagaoka T, Moromizato K, Sunagawa M, Hanihara T, Yoneda M, Hirata K, Ono H, Amano T, Fukumine T, Ishida H. Degenerative changes of the spine in people from the Okhotsk culture and two ancient groups from Kanto and Okinawa, Japan. 査読有, 120 巻, (2012), 1-21
⑰ 百々幸雄, 川久保義智, 澤田純明, 石田肇 頭蓋の形態小変異からみたアイヌとその隣人たち Ⅱ. アイヌの地域差, 査読有, 120 巻, (2012), 135-149
⑱ 増田隆一, 坂絵利, トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点出土ヒグマ骨のミトコンドリア DNA 分析, 査読無, (2012), 360-366
⑲ 菊池俊彦, サハリン北部のナビリ文化とピリトゥン文化, 北方島研究, 査読有, 10 号, (2012), 53-66
⑳ 野村祐一・中村和之, 南北海道の古銭とベトナム銭「開泰元寶」の発見―志海苔古銭と涌元古銭―, 月刊考古学ジャーナル, 査読有, No.626, (2012), 25-28
㉑ 中村和之・高橋直樹, 北海道で見つかった本邦初出土のベトナム古銭「開泰元寶」について, 出土銭貨, 査読無, 31 号, (2012), 73-77
㉒ 中村和之, 北・東北アジアの先住民族と環オホーツク海・環日本海交流圏, 姫田光義編『北・東北アジア地域交流史』有斐閣, 査読無, (2012), 23-47
㉓ 中村和之, 謝遂『職貢図』にみえるアイヌのイナウカサについて, 史朋, 査読有, 第 45 号, (2012), 1-17
㉔ Sato, T., Razhev, D., Amano T., Masuda, R. Genetic features of ancient West Siberian people of the Middle Ages, revealed by mitochondrial DNA haplogroup analysis, Journal of Human Genetics, 査読有, 56 号, (2011), 602-608
㉕ Shimoda Y, Nagaoka T, Moromizato K, Sunagawa M, Hanihara T, Yoneda M, Hirata K, Ono H, Amano T, Fukumine T, Ishida H.

Degenerative changes of the spine in people from the Okhotsk culture and two ancient groups from Kanto and Okinawa, Japan. Anthropological Science, (2011) DOI: 10.1537/ase.100925

㉖ 天野哲也・小野裕子，オホーツク集団と続縄縄文集団の交流，高志書院，査読無，(2011)，27-34

㉗ 天野哲也，ヒグマ観念の交流，中世東アジアの周縁世界，同成社，査読無，(2011)，204-207

㉘ 小野裕子・天野哲也，アイヌ化と領域－北奥アイヌ文化の形成過程を考える－，中世東アジアの周縁世界，同成社，査読無，(2011)，283-300

㉙ 天野哲也，有孔・溶融土器，史跡モヨロ貝塚，網走市教育委員会，査読無，(2011)，337-341

㉚ Matsukusa H, Oota H, Haneji K, Toma T, Kawamura S, Ishida H.
A genetic study of the Sakishima Islanders reveals no relationship with Taiwan Aborigines but Ainu and main-island Japanese.
American Journal of Physical Anthropology, 査読有，(2010)，DOI: 10.1002/ajpa. 21212.

㉛ Yuichi I. Naito, Yoshito Chikaraishi, Naohiko Ohkouchi, Hitoshi Mukai, Noah V. Honch, Yukio Dodo, Hajime Ishida, Tetsuya Amano, Hiroko Ono, Minoru Yoneda
Dietary reconstruction of the Okhotsk Culture of Hokkaido, Japan, based on nitrogen isotopic composition of amino acids: implication for the correction of radiocarbon marine reservoir effects on human bones.
Radiocarbon, 査読有，52 巻 2 号，(2010)，671-681

㉜ 中村和之・高橋直樹ほか，知内町涌元古銭の調査－第１報，出土銭貨，査読有，(2010)，79-84

㉝ 中村和之，蝦夷錦，北方での清朝と日本の交流，別冊 環，査読有，16 号，(2010)，262-270

㉞ 浪川健治，列島の食文化－サケをめぐる文化，食文化－歴史と民族の饗宴，査読有，(2010)，29-60

㉟ Sato, T., Amano, T., Ono, H., Ishida, H., Kodera, H., Matsumura, H., Yoneda, M., and Masuda, R.
Mitochondrial DNA haplogrouping of the Okhotsk people based on analysis of ancient DNA: an intermediate of gene flow from the continental-Sakhalin people to the Ainu.
Anthropological Science, 査読有，117 号，(2009)，171-180

㊱ Sato, T., Amano, T., Ono, H., Ishida, H., Kodera, H., Matsumura, H., Yoneda, M., and Masuda, R.
Allele frequencies of the ABCC11 gene for earwax phenotypes among ancient populations of Hokkaido, Japan.
Journal of Human Genetics, 査読有，54 号，(2009)，409-413

㊲ Matsumura H, Ishida H, Amano T, Ono H, Yoneda M.
Biological affinities of Okhotsk-culture people with East Siberians and Arctic people based on dental characteristics.
Anthropological Science, 査読有，(2009)，121-132

㊳ 天野哲也，サクシュコトニ河畔の暮らし，サケ類とアイヌ民族の関わり，サケ学入門，北海道大学出版会，査読無，(2009)，185-202

㊴ 天野哲也，礼文島香深井１遺跡２号竪穴住人の行方－オホーツク文化前期・中期の開拓と挫折－，北東アジアの歴史と文化，同成社，査読無，(2009)，287-295

〔学会発表〕(計 25 件)

① 三宅俊彦
東ユーラシアの出土銭，環東アジア研究センター学術講演会，新潟大学，2013.3.28

② 三宅俊彦
中国銭の国外への流出，東アジア世界史研究センター研究会，専修大学，2013.2.2

③ 小嶋芳孝
日本から渤海に渡航した人々が見た風景，金沢学院大学文学部歴史文化学科・公開講座，富山県民会館，2012.10.5

④ Tetsuya AMANO
A comparative study between East and West Eurasia on the relationship between the brown bear and humans—the characteristics of the Altai region.
History and culture of medieval people in the Eurasian Steppe (2nd International Conference for Medieval Archaeology of Eurasian Steppe),University of Altai, RUSSI, 2012.9.8 - 9.11

⑤ 小野裕子
オホーツク文化 その形成・展開・消滅を辿る，北の縄文文化を発信する会・連続講座，紀伊國屋書店札幌本店１階インナーガーデン，2012. 7.22

⑥ 関口 明
中世ラッコ交易の諸問題，北海道大学総合博物館公開シンポジウム・基盤研究(B)海外「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」国際シンポジウム「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」，北海道大学理学部 N307，2012.6.3

⑦ 中村和之
北海道におけるガラス玉の流入とその背景，北海道大学総合博物館公開シンポジウム・基盤研究(B)海外「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」,北海道大学理学部 N307，2012.6.3
⑧ 三宅俊彦
サハリンの出土銭貨調査，北海道大学総合博物館公開シンポジウム・基盤研究(B)海外「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」国際シンポジウム「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」，北海道大学理学部 N307，2012.6.3
⑨ Iu. ニキーチン
渤海研究から見たパシェット洞窟の調査結果，北海道大学総合博物館公開シンポジウム・基盤研究(B)海外「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」国際シンポジウム「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」，北海道大学理学部 N307，2012.6.3
⑩ 小嶋芳孝・Iu. ニキーチン
ロシア沿海地方における渤海時代の遺跡分布から見た歴史像，北海道大学総合博物館公開シンポジム「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」，北海道大学理学部 N307，2012.6.3
⑪ 増田隆一
オホーツク文化圏を含む古代人の移動の歴史について，北海道大学総合博物館公開シンポジウム・基盤研究(B)海外「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」国際シンポジウム「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」，北海道大学理学部 N307，2012.6.3
⑫ 石田　肇
オホーツク文化人の生活誌，北海道大学総合博物館公開シンポジウム・基盤研究(B)海外「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」国際シンポジウム「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」，北海道大学理学部 N307，2012.6.3
⑬ A.ハリンスキー
バイカル地方産鉄製品の流通と鍛冶技術の転移，とくに極東地方との関係，北海道大学総合博物館公開シンポジウム・基盤研究(B)海外「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」国際シンポジウム「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」，北海道大学理学部 N307，2012.6.2
⑭ 天野哲也
オホーツク文化の鉄鋼製品の産地と鍛冶技術のルーツの推定，北海道大学総合博物館公開シンポジウム・基盤研究(B)海外「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」国際シンポジウム「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」，北海道大学理学部 N307，2012.6.2
⑮ 小野裕子
オホーツク文化の形成と「靺鞨文化」の関係に関する一考察，北海道大学総合博物館公開シンポジウム・基盤研究(B)海外「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」国際シンポジウム「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」，北海道大学理学部 N307，2012.6.2
⑯ 佐々木史郎
近世の環オホーツク海地域南部におけるクロテン，ギンギツネの流通と狩猟方法，北海道大学総合博物館公開シンポジウム・基盤研究(B)海外「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」国際シンポジウム「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」，北海道大学理学部 N307，2012.6.2
⑰ 菊池俊彦
オホーツク海補記右岸地域とサハリンの交通路，北海道大学総合博物館公開シンポジウム・基盤研究(B)海外「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」国際シンポジウム「環オホーツク海域地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究」，北海道大学理学部 N307，2012.6.2
⑱ T. Amano, B. Fitzhugh, and V. Shubin
Common Law of Territoriality and the Right to Travel Freely Offshore.
Natural and Cultural History of the Kuril Archi-pelago Kuril Biocomplexity Project Synthesis Workshop , University of Washington, USA, 2011.11.1
⑲ 小野裕子
オホーツク文化とは―北東アジアからの古代海洋民，噴火湾考古学研究会主催シリーズ第 23 回『縄文講演会』，だて歴史の杜カルチャーセンター,2010.3.27
⑳ 天野哲也
古代日本海北部地域の交流，
第 2 回環日本海地域の古代史・スプリングセミナー古代日本海域の考古学―城と交流金沢学院大学美術文化財学部文化財学科，石川県立歴史博物館・学習ホール，2010.3.15
㉑ 増田隆一
DNA からみる古代オホーツク人の系譜，
第 16 回氷海の民シンポジウム（第 25 回北方圏国際シンポジウム分科会）
紋別市文化会館，2010.2.22

㉒ Masuda, R
Ancient DNA researches on natural history of northern Japan.
The 1345th Biological Symposium of National Institute of Genetics.
National Institute of Genetics, 2009.10.26
㉓ 中村和之
1809年9月5日に間宮林蔵は何を見たか？
国際シンポジウム間宮林蔵が見た世界,
函館市中央図書館, 2009.8.29
㉔ 中村和之
中国史料にみえる骨嵬・亦里于と吉里迷―瀬川報告に対するコメント―
北海道・東北史研究会, 留萌市中央公民館
2009.8.8
㉕ 増田隆一
遺伝子から読み解く北海道の自然史, 帯広百年記念館・博物館講座, 帯広百年記念館,2009.5.16

〔図書〕(計 4 件)
①菊池俊彦編
北東アジアの歴史と文化, 北海道大学出版会, (2010) ,582 頁
②天野哲也・池田栄史・臼杵勲編
中世東アジアの周縁世界, 同成社, (2009), 349 頁
③ 岸上伸啓,佐々木史郎, 他 12 名共著,明石書店, 開発と先住民, (2009), 360 頁
④ 菊池俊彦, 平凡社, オホーツクの古代史 (2009), 207 頁

〔産業財産権〕
○出願状況 (計 0 件)
○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
天野　哲也 (AMANO TETSUYA)
北海道大学・総合博物館・資料部研究員
研究者番号：90125278

(2)研究分担者
小嶋　芳孝 (KOJIMA YOSHITAKA)
金沢学院大学・文学部・教授
研究者番号：10410367

関口　明 (SEKIGUCHI AKIRA)
札幌国際大学・人文学部・教授
研究者番号：30187843

浪川　健治 (NAMIKAWA KENJI)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：50312781

菊池　俊彦 (KIKUCHI TOSHIHIKO)
北海道大学・　・名誉教授
研究者番号：70000619

石田　肇 (ISHIDA HAJIME)
琉球大学・大学院医学研究科　・教授
研究者番号：70145225

佐々木　史郎 (SASAKI SHIRO)
国立民族学博物館・研究戦略センター・教授
研究者番号：70178648

増田　隆一 (MASUDA RYUICHI)
北海道大学・大学院理学研究院・准教授
研究者番号：80192748

中村　和之 (NAKAMURA KAZUYUKI)
函館高等専門学校・一般科目人文系・教授
研究者番号：80342434

小野　裕子 (ONO HIROKO)
北海道大学・総合博物館・資料部研究員
研究者番号：80400034
(分担者の期間: H21-H23, H24.10.31-H25.3.31)

三宅　俊彦 (MIYAKE TOSHIHIKO)
専修大学・文学部・講師
研究者番号：90424324

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者
松枝　大治 (MATSUEDA HIROHARU)
北海道大学・総合博物館・資料部研究員
研究者番号：21018921

赤沼　英男 (Akanuma Hideo)
岩手県立博物館・第二学芸課課長

Artur V. Kharinskiy
Technological University of Irkutsk, Professor

Yury G. Nikitin
Institute of History, Archaeology, and Ethnology of Peoples of the Far East of the Far Eastern Division ofthe Russian Academy of Sciences, Director